

## ベーターを通して幸福を考える

二〇一六年七月二十日

バイブル・サービス

氏 家 靖 浩

皆さんこんにちは。普段、私は講義も含めて何か話すときに原稿は見ないんですが、さすがにバイブル・サービスでお話をするにあたり、間違えてはいけないというところがあるので、後でちょっとだけ原稿を見ますのでお許し下さい。

私は人間発達学科で、心理学や教育相談の科目を担当しています。私は仕事を通して、専門家に頼らなくても、楽しく、心癒されるような生活ができる世の中を作っていきたいということを一番の目標にしています。そのために、講義では、皆さんが悩んだときに、すぐに誰かに助けを求めて欲しいし、いつかその逆になる場合もあるわけで、誰かを助けるという側になるかもしれないということを、常に覚えていてくださいね、というような講義をしています。

もうひとつ大切にしたいと思っていることは、皆さんの中で私をよく知らないという人でも、学内のあちこちでよく立ち話をしている私を見かけると思っています。なぜその人と立ち話しているのかと、自分自身も立ち話をしながら不思議に思う時もあります。今、五号館の研究室からここに来ただけでも三人くらいの人と立ち話をしてき

ましたが、内容は全然違いました。前回のバイブル・サービスでも申し上げましたが、私は「話す」ということはすごく重要なことで、心の中にあるモヤモヤしたものを手放すような意味合いもあると思いますし、聴くことによつて新たな情報が得られることもあります。私は結構、意外なところで意外な人と、意外な話をするので、後で振り返ると、この人からなぜそういう情報をもらったのだろうとすごく不思議な思いをすることもあります。思わぬ人からいただいた情報が、後ですごい重要な情報になっているときがあるので、私は立ち話が大好きですし、とにかく世間話がとても好きなのです。

実は、私は今、虫歯が無いのです。加藤先生と私は、ほぼ同じ年齢かと思いますが、虫歯が無い人間は立派だと思いませんか？褒めてくれというわけではありません。私に虫歯が無いのは、歯医者さんに行くのがすごく大好きで、歯医者さんと、いろいろ世間話をするのが好きなのです。今、行っているのは、ある女性アイドルの旦那さんのお弟子さんにあたる歯医者さんです。その歯医者さんの妹さんの大親友が女優さんで、芸能界の情報を仕入れながら歯の処置をしてもらっています。以前お世話になっていた歯医者さんでは、治療が終わると「氏家さん、〇〇」というイベントがあるから行こう、「こういうイベントがあるから行こう」と、よくあちこちに誘ってもらうことがあります。歯医者さんで歯の治療をもらった後にイベントに行くことは、なんか変な感じですがね。

あるとき、その歯医者さんから、べてるといふところの活動の記録映画があるから、それを観に行かないか、と誘われました。「べてる。何だろう、それ」と一瞬思ったのですが、とにかく物好きなので、行ってみようと思いましたが。そこで何かが得られたら面白いし、得られなかったらそれまでだ、という思いでした。今も映画を撮り続けているカメラマンや、裏方のスタッフの人とお喋りをして一緒に映画を見るといふ場に誘ってもらい、お茶を飲みながら、とても長い時間、映画に関するお話もさせてもらいました。

べてるはどういうところかというところ、北海道の浦河にあります。北海道ご出身の方、矢口先生はご存知ですか。(矢口 よく知っています) ありがとうございます。襟裳岬というところがありますが、皆さん分らないでしょう。東京都知事選挙の応援をしていた、「こんばんは、森進一です」と、かすれた声の歌手がいますが、『襟裳岬』という歌を今から四十年くらい前に歌っていました。その歌のモデルになった襟裳岬の近くに、人口よりも馬が多いという浦河という町があり、そこにべてるという不思議な団体があります。それは何かというと、心に病気を持った人が、人口のいない、向かい側は太平洋、後ろ側は日高山地で、馬の人口(人口とは言わないでしょうね)の多いところで、太平洋から採れる昆布などを干して、それを障がいのある人と、もともと土地に暮らす高齢者の方、皆が昆布を採ってきて、昆布を干しては売っています。馬のお世話をした写真集などを出版し、売ることでお金を儲けながら、なんと北海道の大都市である札幌や、他の都市に負けないくらいの町としてのお金儲けが成り立っていた、という記録映画です。お金儲けと言うと、ちょっと嫌なように聞こえるかもしれませんが、とても重要なことだと思えます。都会にいたときは、心の病気ということで、皆から差別され、偏見をもたれ家族と一緒に暮らすこともできない。それが、むしろ人が少ないところに来て、何ができるわけでもなく、嵐の翌朝に太平洋の浜辺に打ち上げられた大きい昆布を採り、乾かして、皆でそれを切って袋詰めをして、袋の上には「心の病気の僕が採りました。この昆布を食べても、心の病気はうつりません」と書いてあるのです。

今、いろいろな意味で地産地消であるとか、あるいは誰が作ったか、生産者の表示とされています。そういうことが叫ばれる十年以上前から、「これは心の病気の僕が何もできないけれど、太平洋で育てられた昆布を採ってきて、その昆布を僕が乾かして食べられるように整えたものが、皆の食卓に並んでくれたら、僕の心の病気は治らないかもしれないけれど、皆さんが幸せであればそれでいいと思います」と言って売られているのです。これが爆

発的に売れたのです。売れていたものと記録映画が、私は最初、結びつきませんでした。しかし、結局、昆布なんてただ食べておしまいますが、昆布一つを採ってくるために、心の病気を患っている人は、わざわざ大都會の東京から、北海道の海と馬と山しかないようなところに移り住み、そこで自分が心の病気であるということを仲間たちにすべてオープンにしながら、隠すことも無く、とにかく辛いことがあっても「僕は今、今日こんなふう辛いんだ」ということを語り、「私は今、すごく憂鬱です」というようなことを皆で、心の中に留めておくのではなく話すことによって解消し、尚且つ、お金儲けというか商業ですね。商売が成り立っているという、そういうところが日本の地方にあったということが、すごく驚きでした。同時にそういうところに入り込んで、ずっと記録映画を撮り続けている人がいるのです。

この記録映画を撮り続けている人は、北海道の人のいないところで行われている素敵な実践が、誰にも気付かれないまま終わるのはいらない、これは皆に教えなければいけないのではないかと、と記録映画を撮り続けています。ところが、映画を撮っている人自身が、この場面を残そうとか、この場面はいらないな、と思えなくなってきたと言います。私がお会したのは十五年くらい前ですが、そのときでさえ、記録した映画は三十数巻になっていて、最初の一本から後は、予告編とか続編となっていました。ただ単に朝から晩まで延々と撮っています。そうすると、面白いいろいろな起るのです。一所懸命、昆布を干す作業をしている傍らで誰かが喧嘩を始めたたり、別の巻では、すごく仲良くなっていたりするので、ですから、こっちを残して、こっちはいらんということとはできないと言います。そして、気が付くと、『very ordinary people (とてもとても日常的な人々)』という映画が出来上がりました。恐らく今もインターネットか何かで探せば出てくるかもしれませんがね。もしかしたら、既に百巻を超えているかもしれません。それくらい普段から日常というドラマの中で、私たちも生きているのだと思

います。それには気付かないですよね。

このべてるという活動、団体は、私は心の中ですごくいいところだと思い、あちこちで紹介していました。紹介しているうちに、あるときテレビが全国にわあっと紹介してしまったので、私は、もうこの話をしなくなりました。たまたま、コミュニティ心理学という講義のときに、一、二回話題に触れます。重要なことは、心の病気になってしまった、あるいは、身体の病気になってしまったということは不幸なことではなくて、それを隠してしまおうとか、それを無理に歪めて考えてしまうのではなく、ありのままの自分自身を見つめて、他の人にも、僕はこういうことが辛いんだ、私は大変なんだ、ということ語り合って生きていき、自分の人生の中にはつまらないときもあれば、楽しいときもある、あるいは、とてもハッピーなときもあれば、とてもアンハッピーなときもあるんだということが人生そのものなんだよな、と見つめ直すことによって、私たちの人生は、実は一瞬たりともいらぬものがない、とてもとても普通の、しかし、とてもとてもかけがえの人生なんだよな、ということを気付かせてくれたものが、この北海道のべてるというところでした。こう考えてみると、私たちは多分、辛いことや、悲しいことがあるからこそ、どこかでまた楽しいことが起きるのだと思うし、楽しいことがあるということは、どこかでまた大変なことがあるのかもしれないと思うのです。

先ほども言いましたが、私は日常的に暮らしている中で、人が幸せになるにはどうしたらいいのか、専門家に頼らなくても人が普通に暮らしている場所で、普通に暮らしながら楽しみを見つけるにはどうしたらいいのかというのを研究テーマにもしていますし、自分も実践しているつもりですが、結論として一言言えることは、立ち話は有効だな、ということですよ。そのせいか、ついあちこちで無駄な立ち話をしてしまうのです。今朝、矢口先生と立ち話をしたかったです。矢口先生は逃げて行ってしまいい残念でした。

北海道のコミュニティは、実は「べてる」とひらがなで音を伸ばさずに簡潔に記していますが、音や表現としてこの「べてる」という名前の語源というか由来はどこにあるのかというとドイツにあります。ドイツのノルトライン＝ヴェストファーレン州というところです。ドイツの北西にあるところでしたが、そこに「ベーター」という同じような活動、団体があり、日本の北海道にある「べてる」は、そこから名前を取ったということでした。

旧約聖書の古事で、「アブラハムの子、イサクの子ヤコブは、天に達する階段を夢みて、神の祝福をうけ、その土地をベテル（神の家）と名づけた」というところから取った名前だそうです。私は実は、ドイツのベーターにも行ってみたのです。行ってみて、また驚くことがありました。それはビーレフェルトという町でしたが、駅を降りてみると、まったく普通の町でした。幸い、私のガイドをしてくれる人がいたので、その方と一週間、一緒に活動しました。そのあいだ、だれが障がいのある人で、だれが健康な人なのか、一切分かりませんでした。よくよく聞くと、町の人口は三十万人くらいいるうち、十万人がなんらかの障がいのある人だということでした。その場にいるときは全然分かりませんでした。もしかすると、私たちは最初から色眼鏡で見ると、これは障がいがあるな、とか、これは病気だなとか、これは善い人だとか、これは悪い人だと思われるのかもしれない。しかし、日本人がドイツに行き、見た風景は、はっきり言う、「皆ドイツ人だった」というだけなのです。まんべんなく声をかけてくれるドイツ人もいるし、私を無視する人もいるし、私が一所懸命「グーテンターク」とドイツ語で挨拶を言うと、「グーテンターク」と返すやり取りを延々繰り返すだけで、どの人が障害や病気のある人なのか、健康な人だったのかも、よく分からないまま、一週間を過ごして戻ってきました。そのとき、やはり、また改めて思ったのは、必要以上に病気や障がいを分けて考えるのではなくて、私たち自身が色眼鏡で見なければ、それぞれその人にある、その人の個性として見るのが習慣化してさえいるのであれば、もしかすると、この人は病気だ、この人は障

がいだという区分が無く、もっと楽しく生きていけるのではないかということに気付かされました。ドイツのペーテルというところは、今もそれを淡々と毎日実践しているのです。

ペーテルで印象的なものの一つに、こんなものがありました。ペーテルの中にある支援学校です。障がいのある子のための学校として、特別に作ってあります。そこで、面白いと思ったのは、先生方の方が障がいのある人が多く、学校に通っている生徒さんの方が健康な人が多いそうです。学校の廊下には、先生方の一覧が貼ってあり、「この方は、結構シビアな病気です」「この方は、治らないと何度も宣告されました」「この方は手術を終えたばかりです」と書かれたものがいっぱい貼ってあり、むしろ生徒の方が健康な子どもたちが多いと言われると、私は何も言えなくなります。更には、端っこの方には、何頭かの馬の写真も飾ってありました。これは何かと聞いたら、「馬も貴重な先生ですからね」ということでした。要するに、乗馬をしたり、馬のお世話をすることによって、慈しみが生まれる、ということなのです。私は、本当にそれ以上何も言えなくなり、ただ、ただペーテルという組織にドイツの文化も合ったのかもしれないと思いますが、敵わないと思います。今度、仙台白百合女子大学も先生方の一人ひとりの名前と、それぞれの先生がどういう困難を抱えているか、どこかボードに貼り出すと、学生さんの見方がちょっと変わるかもしれませんよね。

とにかく繰り返しますが、私たちの身近な中にある目に見えない幸せのようなものに、いかに気付くか、その「気付く」ということは、気付こうとする努力がないとやはり駄目ですし、また逆を言えば、私たちは自分のことを不幸だ、不幸だと思っていれば、どんどん不幸になっていくのだと思います。

今から六年ほど前、私たちは東日本大震災を経験して、この春には、九州の熊本を中心に大きな地震がありました。私は、その熊本にいる「この方」を見てみると、すごい安らぎが生まれます。私は「似てる似てる」と、ここ

に勤めてからずっと言われています。それは、くまモンです。こういう人が、おそらく何ができるわけでもなく、言葉を出すわけでもなく、ただただ無言で動くくらいのような方、でもその一人に救われている人がいるのだったら、私はくまモンをゆっくり研究してみたいなと思います。こういう人に私はなりたいし、皆さんもなれるチャンスが多分、あると思います。それは、すべての人にはないかもしれないかもしれません。もしかしたら、自分の家族か、自分の友達か、何人かの人のためだけの安らぎにしかねないかもしれないかもしれません。でも、私たちはそういう意味での努力はしておきたいと思います。くまモンは立派だと思えます。何を、言葉を言うでもなく、へんてこりんな動きをするだけです。でも、この方を見ると何となく、ほっとしますよね。熊本に地震が起きたことは大変悲しいことですし、私たちも東北で地震を味わったということは悲しいことです。しかし、熊本には、こういう元気の源がいるし、東北は私たちの中から、きつと、くまモンほどではないけれど、誰かのために何か癒しをあげる方たちが、きつといるはずだという思いがあり、地面が、わざと悪戯したんだろうなと思いたいです。誰のためでもない、自分の隣にいる誰かのために、ちょっとだけ優しくしてあげることによって、何か、きつと笑顔が増えていくような気がします。是非、ベてる・ベーターという場所、くまモン、そして氏家、と今日は三点セットで覚えていただければと思います。以上で終わります。

(人間発達学科教授)